

## 編集後記

▼「現代宗教研究」第二十六号をお届けします。一九九一年は、湾岸戦争に始まりソ連邦の消滅で終わった。世界が大きく動いた年であった。現宗研では、その時の話題に併せて諸先生方に御講演をしていただきました。湾岸戦争では湯田先生からアラブの宗教事情について、墓地問題については井上先生から墓を通して見た現代の家族と死後観等について、お話をうかがった。

日蓮聖人は、常にご自分を法華経信仰の世界の中に時間的空間的に位置づけ、そこから鋭い洞察力によって現実社会を見据え、活動をされてきました。社会状況の変化の激しい今、私たち宗教者が社会の動きをどう捉え法華経を実現させていくのか、その宗教者としての在り方が問われているのではないのでしょうか。

▼教化学研究集会では、本山先生から気のエネルギーの存在とその働き、気の流れのバランスと身心の健康の関係について、科学的な講義をしていただいた。又、影山研究員は、本宗の唱題行が身体に与える影響とその効果を数値で示し、今後、宗教体験も科学的に証明されてい

くことの一端を表した。

▼北米開教庁に「開教布教センター」が設置された。報告の中の三角ピラミッド型組織は、より効果的な布教を企画・実行していく上での画期的なシステムといえる。だが、今一番望まれていることは、外国語のテキストであり日本国内の研究所・地域教化センターとの連携だという。教化センターに期待したいところです。

▼「新宗教調査報告」が三回目を迎えた。今回円応教では、霊能者から修法の実修を受け、書籍からは得られない生の情報が報告できたと思う。

▼「人の死」についてはいろいろな考えが世の中に存在していることに十分な配慮を示しつつ、良識に裏打ちされた臓器移植が推進され、それによって一人でも多くの患者が救われることを希望するものである——平成四年一月、脳死臨調答申の結びの言葉である。科学の進歩が生み出した、新たな生と死の線引きである。宗教者としてどう捉えていくのか。今後の大きな課題と言える。

▼御講演をいただいた諸先生、御執筆を賜りました諸聖に心より御礼申し上げます。

(木村記)